子どもたちへのメッセージ集　2013

～　命の尊さと震災の教訓を語り継ぐ　～

はじめに

平成7年1月17日、阪神・淡路大震災があり、

多くの方が亡くなり、家を失いました。

その大災害を経験された方たちから、命の大切さや

震災から学んだことを、子どもたちに伝えるために

寄せられたメッセージを載せています。

みなさん、ぜひ読んでみてください。

《子どもたちへのメッセージ運動の活動にご協力いただいた方々》（五十音順、敬称略）

絵手紙「栄」フレンズ、絵手紙わかば、クリスタル・ベル、神戸市ＰＴＡ協議会、神戸市立幼稚園 PTA 連合会、神戸市立小学校 PTA 連合会、神戸市立中学校 PTA 連合会、神戸市立高等学校 PTA 連合会、神戸市立盲・養護学校 PTA 連合会、神戸学院大学地域研究センター、神戸市混声合唱団、神戸市老人クラブ連合会、神戸デザイナー学院、神戸ヤングクリエイティブクラブ、サークル紙ふうせん、スタジオ・チーズ、大日通周辺地区まちづくりを考える会、日本赤十字社兵庫県支部及び声の図書奉仕団、NPO 法人ふたば

《これまで協力校となっていただいた学校》

有野東小学校、池田小学校、板宿小学校、井吹西小学校、会下山小学校、樫野台小学校、春日野小学校、高津橋小学校、小寺小学校、塩屋小学校、成徳小学校、玉津第一小学校、長田南小学校、稗田小学校、兵庫大開小学校、本庄小学校、湊川多聞小学校、本山第二小学校、若宮小学校、井吹台中学校、上野中学校、楠中学校、鷹匠中学校、鷹取中学校、飛松中学校、友が丘中学校、長坂中学校、長峰中学校、葺合中学校、福田中学校、本庄中学校、港島中学校、本山中学校、丸山中学校、兵庫県立舞子高等学校

子どもたちへのメッセージ集2013
～命の尊さと震災の教訓を語り継ぐ～

もくじ

✉ 子どもたちへのメッセージ（26通）

震災当時の様子 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 1ページ

たすけあい ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 8ページ

体験から学んだこと ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 13ページ

感謝の気持ち ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 20ページ

子どもたちへのエール ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 27ページ

※ 内容によってテーマ分類しています。

※ 経験や想いを尊重してお伝えするため、誤字・脱字を除き、メッセージを原文どおり掲載しています。

✉ メ　モ ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 34ページ

✉ 子どもたちからの感想文（12通）・・・・・・・・・・・ 35ページ

子　ど　も　た　ち　へ

1995年１月１７日午前５時４６分に突然の悪夢が阪神地方を襲いました。地響きのようなゴー…という音がしたと思ったらドォーンと突き上げられ、体が浮きました。そして激しい横揺れが続き、閉じていた目をあけると天井の電気が激しく揺れ、バァーンと電球が破裂しました。天井が揺れてる！天井が崩れる！と思うほど揺れました。家の中は割れた皿や倒れたテレビや冷蔵庫などで、めちゃくちゃでした。その上をはだしで歩き、手探りでくつとはんてんをみつけました。ドアは曲がってしまい開けることができません。台所にあった小さな窓から外に出ました。木造の家はすべて壊れ、阪神電車の線路は波打っていました。

それから近くの小学校に避難をしました。寝巻きのままで出てきたので私はくつ下をはいていませんでした。足が冷えるからと毛糸のくつ下をさし出してくれた人がいました。少しだけどと家にあったおかきを配っている人もいました。とてもありがたくて、涙がでそうになりました。あの当時はみんなが先の見えない不安の中にいました。いろんな人が助けに来てくれました。「人と人とのつながり」「人の優しさと強さ」そして何より「命が大切」だということを知りました。

みなさん、今の生活を当たり前だと思わないでください。突然明日をうばわれてしまうかもしれません。当たり前のようにいてくれる家族や友達を大切にしてください。そして、当たり前のように過ごせる毎日に感謝してください。

２０１３年１月４日

子　ど　も　た　ち　へ

「ゴーッ」という音とともに、家が激しく揺れました。ロフトのベッドに寝ていたので、床に振り落とされないように、必死でベッドの端をつかんでいました。「ガシャン　ガシャン」と瓦や食器が落ちて割れる音も、家が「ギシッギシッ」と異様な音をたてていたことも、今でもはっきりと思い出される記憶です。

何が起こったのか、よくわからないまま、階下に下りて家族の無事を確認しました。当時、おじいちゃんは、現役の警察官だったので、すぐに呼び出しの電話がかかり、出かけて行きました。確か電気・ガス・水道が止まっていたのに　この緊急の電話だけはかかってきたのが、今でも不思議です。その日から、おじいちゃんは、３ヵ月くらい警察署から帰らず任務にあたっていました。過労で倒れるのでは…と心配でした。私達は、近くの小学校の保健室に、しばらく避難させてもらい、そこから灘区の様子を見ると、六甲の方から火が上がっているのが、見えました。また１丁目南側では、外に出されたご遺体も見ました。どの情景も今までに体験したことのない悲惨なものでした。

友達の名前を新聞の死亡者欄で見つけ、歩いて、遺体安置所へ向かいました。

友達の住んでいたアパートは全壊し、遺体が発見された時、お母さんが、その友達の上にかばうように　重なって、２人共亡くなっていたそうです。圧死でした。

東遊園地に、その友達の名前プレートもあります。ずっと神戸に住んでいますが、１５年間　そのプレートの場所まで　行くこともできませんでした。

２０１３年１月１７日

綾子

子　ど　も　た　ち　へ

私は神戸市中央区で震災にあいました。前日は広島に出張していて、夜１１時頃帰宅し、１２時頃眠りにつきました。

眠っている最中に急に寝床が突き上げるような振動と共に地面から轟音がして寝室に置いているガラスケース付きのたんすが足の上に倒れてきましたが、布団がクッションになり怪我をせずに済みました。外灯が窓から明かりを照らしているので、電子レンジが棚から転がり落ちる様子、テレビが布団の上に転がってくる様子が見えました。

その直後に停電になり、周りは真っ暗になり、起き上がるにも全然見えなくなったので電気がつくのを待ちましたが、その後電気がついては消えるので、夜明けを待ちました。

夜が明けてからは、近所の人達が、外に少しずつ現われて、無事である事がわかってひと安心しましたが、すぐ隣には外科病院があり、怪我をした人達が次々と運ばれて来ていました。病院の中も地震のせいで治療できる状況ではありませんでしたが、重症患者は、近所の人達と一緒にベッドへ搬送し処置をしました。患者の中にはすでに顔が土色になり死亡していた人も含まれていました。病院側も被害を受けているので、患者の受け入れが出来ないという事で、患者数が自然と減り、少し落ち着いたので、病院から少し離れました。

周辺の様子を見てみると、完全に破損した家が数軒あったり、火事で燃えていて、消防隊が来たものの、消火栓を開けても水が出ず諦めてひきかえす様子が見えました。

その後　２、３日は　余震で家の中で生活できないので外で火を焚き夜明かし

しました。水道・ガスは使用できず、電気のみだったので、フロ、トイレも使用できない為、大阪の寮に入り、月に一度、復旧の様子をみに神戸へ帰るものの、水道・ガスの復旧に時間がかかり、半年後漸く家へ戻る事ができました。

しかし家が破損して住めなくなった周りの人が引越したり、以前にぎやかだった商店街も被害が出て、減少していくのを見て寂しい気持ちになりました。

このような震災は二度と起きない事を望み、夢の中の出来事であればよかったのにと思いました。

平成２５年１月７日

山崎

子　ど　も　た　ち　へ

震災を振り返り今日を一生懸命に大切に生きる

震災の前日、淡路島へ釣りに出かけ、潮見表では大潮なので大漁と確信していました。いつもの場所へ向かうと空や海や波が静まり変な感じで海は深く青黒く染まり小魚の姿も見えませんでした。天気は良いのに野鳥や海鳥たち沖ではフナ虫も見当たらない奇怪な感じです。結局、何の当たりも無く帰ることになりました。テトラポットの間で震えて鳴きじゃくる、まだ半目の子猫が２匹今にも海へ落ちそうな所にいました。私は直ぐ助け置き去りに出来なく連れて帰りました。高速道路が無かった当時は、フェリー乗り場は満員で５時間待ちでの帰宅でした。震災３時間前、深夜に帰宅。子猫綺麗に洗ってミルクを飲ませて就寝。そして３時間後あの忘れられない音で目が覚めました。

グゥーと重低音で鳴り響きその後、縦にドンと建物が動き出しました。住まいはワンルームマンションの 4階でした。私は布団の上で何が起きたか分からないです。再度横揺れが、無我夢中で私の下に子供を抱え、倒れてくる物から身を守りました。食器棚は開きお皿が飛び割れ、タンスが倒れてきて下敷きになりました。ベランダのガラスも割れ、水槽も飛び割れ熱帯魚も叩き付けられました。幸い２人とも、軽症で済みました。子猫たちは押入れの扉が外れて倒れた隙に中に入って２匹寄り添っていました。私は、事の重大さが知りたく、外の様子をベランダから外を見ると、茜色に染まり見たこと無い景色に一変していました。そんな中、職場からの安否確認と招集業務命令の緊急連絡が入りました。至急出勤して市民救済救護に当たるようにとのこと。その電話後は不通になり連絡ができませんでしたね。直ぐに電気や水道など止まりました。

震災当時の様子

「え？こんな状態で？私や子供も怪我があるのに…」と思いながらも幼い子供を連れて職場に向かいました。

住まいは大阪市西淀川で４３号線沿いだったので、地震の影響も大きく度々揺れる地震の中、町の人が混乱の渦の中で泣き叫び家屋は倒壊、信号機が倒れ、街路樹が倒れ、道路が割れて陥没していました。火災で家が燃えて炎上した煙の臭いがしました。職場までの８分の道のりで、大変な事が起こった。目の当たりに見て、自分の愚かさや心の小ささに反省しました。今、私ができること。立場上で無く、人としてやらなければいけないこと。「小さな事でも、自信がないことでも、取りあえずやろう」そんな使命感に変わり向き合う事にしました。

病院には、入院患者と地域の方が避難され沢山の人でした。神戸から救急搬送要請の依頼が殺到しますが、地元の患者だけで対応が大変でした。おにぎり、お茶、毛布、着替えなど揃えては被災地へ届けました。あの時、自分や家族がと優先する人達で大変で優先順位で今出来る事の説明と理解して頂く事が基本としました。人間の本能、自己中心的な感情、願望がむき出しになり自己主張を聞く事が精一杯でした。不安な気持ちで一杯の中、どん底から這い上がる時に何を一番必要なのかが重要。そして、聞き役側も固定観念や自分の思想を押し付けない事。震災を、知ってる人も知らない子供も大人も、人としての成すべき事をやり遂げること。思いやりや優しさを如何なる時も持つこと。リハビリの職業に就き学んだ事は、「再びその人らしく生きる。マイナスからでも再出発できる命を大切にする」事。どんなピンチな時が来ても諦めないことを伝えたいと思います。

平成２５年１月１日　　ペンネーム　石田　珠美

子　ど　も　た　ち　へ

平成７年の１月１７日、あの日の朝に神戸や淡路の人達が経験した例えようもない揺れと轟音の恐怖は、今も体に焼きつけられています。

お父さんとお母さんは今住んでいる灘区の家のすぐ近くのマンションにいました。結婚式の３日前のことで、大きな揺れの中で、白いウェデングドレスが落ちるのを横目に見ながら、全てが破壊されていくことを肌で感じました。

その後、マンションを出て変わり果てた三ノ宮の街や、火の手が上がる長田の街を見ながら、ただただぼう然とするしかありませんでした。信じられない、としか言いようがありませんでした。でも本当に大変なのはそれからでした。多くの犠牲者を知り、１月１７日のその瞬間までは普通に存在していた命が自然の強大な力によってあっさりと奪われてしまう事実に心底恐ろしさを感じました。おばあちゃんや母さんの弟と無事再会できた時の安堵感は今でも忘れられません。飲める水がないこと、ガスや電気がないこと、そして食べるものがないことも震災前までは想像もつかないことでした。ああこれが被災することなんだ…と身を持って感じました。そんな中にあって、近所の人たちが助け合ったり、他県のボランティアの人達が様々な物資を運んでくれたことは、人間の思いやりや感謝の気持ちを、思い出させてくれました。生かされている、と感じることがたくさんありました。

伝えたいことは山ほどあるけれど、忘れないでほしいのは私たちが普通に生活できているこの環境は決して当たり前ではないということです。想像するのは難しいと思うけれど、日々の生活、そして命をもらって生きているということを大切にして下さい。

平成２５年１月６日　　角田　美加

子どもたちへ

私は市役所で働いています。

阪神・淡路大震災のすぐあとは、自分の本来の仕事とは別に、災害対策本部に交代で２４時間配置され、さまざまな問合せにお答えしていました。テーブルの上にはマニュアルと電話が、本部の壁やホワイトボードには、水・電気・ガスなどライフラインに関する窓口、がれきの撤去の窓口などが貼り出され、日々、刻々と情報がかわっていきました。

本部でも職場でも、電話や直接来訪される方へ、一生懸命にいろいろな情報をお伝えしました。復興への道のりは長く、問合せ以外に不安やいらだち、お叱りなど、さまざまな思いを時間をかけてお聴きしました。

なかでも一番印象に残っているのは、８０歳くらいの女性からのお電話です。震災後の悩みをお聴きしているうち、その方は、絞り出すようにおっしゃいました。「友だちがいなくて寂しいんです。」…かける言葉が見つかりません。

友だち…。マニュアルにのっていないことはわかっていましたが、必死で考えページをめくりました。どうしよう…。結局、私は見守りや話し相手となる訪問活動をしておられるボランティアの方々の窓口を紹介しました。

今でも、あの答えでよかったのかと、ふと思い出し、考えます。だって、友だちとボランティアとは違うんですものね。どうしたらよかったのだろう？

あなたなら、どうしますか？あと１０年したら、私と交代してくださいね。未来の神戸を大人の私たちから引き継いで大きく創っていってくださいね。

平成２５年１月１４日

M・O

子どもたちへ

〈おかあさんからあなたたちへ〉

今から１８年前、ここ神戸ですごく大きな地震がありました。家がつぶれ、命をなくした人や動物たちが多くいました。たくさんの人が怪我をしました。大切な、人や物をなくした人がいます。道路はぐちゃぐちゃ、電車も動きません。電気もつきません。とても悲しい出来事です。

あなたたちは今、震災のあった神戸で学校へ行き友達と遊んでいます。それはとても幸せなことです。それは多くの人の努力や協力のおかげです。みんなで力を合わせ神戸の街を元に戻したのです。とても時間がかかったけれど、あきらめずに助け合いました。あなたたちがここで暮らせるのは、多くの人たちの力のおかげだということを覚えていてください。

あなたたちは困っている人がいたらどうしますか？お母さんはあなたたちに困っている人をほうってはおけない人になってほしいと願います。

自分にできることを考えてみてください。力もちの人は荷物を運べます。お金がたくさんあるのなら寄付できます。歌が得意なら、多くの人を笑顔にできます。泣いている人にはそばにいてそっと手を握ってあげましょう。その手のぬくもりが、きっとその人の助けになるでしょう。

お母さんも１つ、自分にできることをみつけました。「献血」です。誰かの役に立ってますように…　お母さんは、人に助けてもらってばかりです。その人たちにお返ししたいけれど、なかなかできません。だから困っている人がいたら誰の力にでもなりたいと思っています。

その人が誰かに、その誰かがどこかの誰かの助けになって力を合わせて生きています。

たすけあい

このことがわかるなら、あなたたちが困った時、たくさんの人があなたたちを助けてくれるでしょう。

２０１３年１月８日

つばめかあちゃん

子どもたちへ

私が大学４回生の時、スキー旅行から帰る途中で地しんにあいました。梅田から阪急電車の始発に乗り、しばらくしたところでピカッと大きな稲光がして大きく電車が上下左右にゆれました。まだ暗かったため何が起きたのか分からず車内に閉じ込められました。陽が登り窓から外の景色が見えるようになると、線路沿いの民家はぺちゃんこに倒れ、かわらしか見えない所もあり、町の人々は走ったり叫んだり、町はパニックでした。車内の乗客で協力し合い、座席のイスを外して、ドアをこじ開け、線路まですべり台のように座席をたてかけて１人ずつ順番にすべり降りました。線路の上を歩き、まだ被害の少なそうな家に入れてもらい、ＴＶで地震が神戸で起こっていることを知り、まだつながっていた電話をお借りして、一緒にいた友達の親せきが付近に住んでいたため連絡を取ると、車で私たち３人をむかえに来てくれました。親せきのお家も家の中はぐちゃぐちゃになり電気も水道も止まり、大変なのにもかかわらず、私たちを２日ほど泊めてくれ、園田から西神中央まで、約１日がかりで送ってくれました。途中で見る景色は心が痛いものでした。たくさんの倒壊した家、ビル、通れない道や橋。西神中央から妙法寺駅までは地下鉄で帰りました。地下鉄でとなりに座った男の人は顔も服もすすでまっ黒で、「板宿から向こうは火の海や。たくさんの下じきになった人を助けたいのに報道陣のヘリコプターの音で、『助けて』の声が聞こえへん。」とくやしそうに話してくれました。板宿まで歩くと言う男の人にスキーのお土産で買ったクッキーを差し出すと、「これはあんたらが持っとき。いつ何も食べる物がなくなるか分からへんやろ。」と言って受け取ってくれませんでした。

やっと３日ぶりに実家に帰れたのは、いろんな人々のおかげだと思うし、大変な時こそ、人と人とのつながり・思いやりが何より大切なんだと身にしみて思いました。

２０１２年１１月３０日

子どもたちへ

阪神・淡路大震災で、私の家は全壊しました。当時私は中学三年生でした。住む家がなくなっても、私は希望する高校に向けて、勉強したかったのです。親戚も近くにはいません。そんな時、当時通っていた塾で働いていた大学生のお兄さんが、住む場所を手配してくれました。私の為に全力で協力してくれました。

人の為にできることを考え、実践する、それがいかに難しく、大変なことなのか、しかしそれがいかに尊く輝くものであるかを体感しました。人は、自分が辛く悲しい経験をすればその分だけ、他人の心の傷みがわかり、優しくなれるものです。

無事、希望の高校に合格した私は、元の姿に戻ろうとする神戸を全力で応援しようと、復興のための募金活動や清掃活動に積極的に参加しました。食べ物も粗末にしなくなり、水道や電気の無駄使いもしなくなりました。普通に食事が出来、温かい風呂に入れるだけで幸せでした。それは今でも全く同じです。

当時救って下さった大学生のお兄さんとは、家が建った時の喜びも分かち合える仲となり、今では私の旦那様となっています。私は震災で、絆の深さがどれほど人生において重要であり信頼できるものかを知りました。人は助け合うもの。手をさしのべて共に生きていくもの。人の笑顔が自分の笑顔になる。そんな温かい心を教えてもらいました。“みんなは一人のために”とはよく言われますが、一人一人を最大限に尊重し、地震で失ったものを埋めていくのはまさに“絆”です。私は震災がきっかけでできた今の家族を大切に、自分の子供を宝物として地震の教訓を伝えてゆきます。

世界が一つになるよう、神戸の絆をずっと広げていきましょう。

２０１２年１１月２７日

上田　絵美

子　ど　も　た　ち　へ

まだ　みなさんが生まれてきていない頃、阪神淡路大震災が起きました。いろんな体験談を聞いてきたことでしょう。写真やＴＶも見たことがあるでしょう。でも　どれも　昔 話 を聞かされているような気持ちでいるかもしれませんね。

昨日の夜、「おやすみなさい」と言ったお父さんが

学校で「バイバーイ　また　明日ね」と別れたお友達が

毎日通った学校や会社、大好きな自分の住む街が　あっというまにもう会えない人になったんです。歩くことすらままならないコンクリートのかたまりになってしまったのです。信じられますか？

私 は毎日、明日が来ることに疑問など持ったことがありませんでした。

だけど、あの１／17 から、大好きな家族と友人と会えることや学校や会社に行けることは実は奇跡なんだと思うようになりました。そして、震災をのりこえて生かされている今、毎日を一生懸命過ごさなければ　命 を亡くした方々に申し分けないなと感じるのです。さよならも言えず人生を終えなければならなかった人の分まで自分にある時間や人生を大切にしたいと。

みなさんが色んなことに悩み、苦しんだりすることがあるなら。１日のほんの少しの時間でいいので 考 えてみて下さい。自分が、もしくは自分の大切な人や物が、突然なくなってしまうとしたら・・。そう思うと苦手なことや嫌なこともきっと頑張れるし、大好きなことはもっと大切にできます。 私 は今でも地震の恐怖から立ち直れていない 所 もあるけれど、それ以上に強く毎日を送ることや自分や人を大切にできるようになったと思っています。

２０１２年１１月２７日

はなすずりきママ

子　ど　も　た　ち　へ

震災のあの日、中学２年だった私は、前日の夜、弟とお母さんの横にねる取り合いをしていました。結局私が横にねることになり、弟は自分の部屋でねました。

その日の朝方ドーンという音と共に自分の体が浮いたこと今でも忘れません。しかしその次に重くのってきたのは、母でした。私の体をめいっぱい自分の体でおおって私をずっと守ろうとしていました。半壊していたわが家で家族全員でお互いの着る物を探し、おじいちゃんおばあちゃんの部屋まで行き開かないドアをぶちこわして助け、おじいちゃん達がさむくないように服を着せ毛布をかぶせて必死に外へ出ました。出た道路では火がもえていました。がくぜんとしたことを今でも覚えています。学校の運動場へいくと沢山の人が寒さにふるえながらいました。どこの人か分からない人達と共にお年よりの人に毛布をかぶせてあげたり、お互い力を合わせて朝まで待ちました。

地震を経験し、家族の大切さ、母の強さ、お互い思いやる心、命の大切さを知りました。傾いたわが家でも、家族全員無事でいられたこと。しかし沢山の方々が亡くなりました。まだまだ生きていたかったと思います。私は生きることができた人間として、亡くなった方の分までがんばらないといけないと思っています。

今生きていることは、奇跡であるとも思います。神様に与えられた運命をどう使うかは自身しだい。この経験を通し、人への思いやりの心、協力する心、絆、沢山の心を学びました。１人では決して生きてはいけない。

人は、人とつながっていくことで、生きていけると私は思います。

平成２４年１２月１日

子　ど　も　た　ち　へ

まだあたりは暗闇の中、大きな揺れと地響きで起こされました。目が覚めてすぐは何が起こったのかも分からず、まずは身支度をしようと思い自分の部屋より１階に降り部屋を開けると、中は物が乱れて散らばっていました。しようがないので部屋に戻ろうと階段を上ると最上段が一段ずれているのに気がつきました。やっとそこで平常ではなくすごい事態だと認識したのです。日頃、そこにあってあたり前だと思っていた事や物の崩壊、自然の驚異、命の大切さを痛感しました。昨日までの穏やかな不自由のない生活とは一変して、衣食住すべての現状を受け入れ、次にどうするべきかを考えなくてはならなくなったのです。まずは住む場所の確保で避難所へ行きました。そこには見知らぬ人々がほとんどでしたが、集団で生活するのにあたって個人の勝手ではなく、ルールを決めました。すると規律、連携、協力、協同、思いやりが生まれ、やがて絆が結ばれました。あの時、震災を体験した人たちは、大なり小なり被害を受けながら同じ時を共有し助け合いました。振り返ってみると、無くした物はありましたが、苦しい中にも楽しいこと、新しい体験など色々な思い出があり、その経験も現在、何かに生かされているのではないかと思います。

人は自然にはかないませんが、自然の中で、今、家族、友だち、一期一会で出会った人たちと同じ時を共有しています。

いろいろなことを体験し、自分を成長させ感謝する「ありがとう」の気持ち、思いやり、ひとりひとりの命の尊さを感じながら、回りの人たちと大切な時を、思い出を一杯作れるよう穏やかな心、穏やかな日々であるようにと願います。

２０１３年１月５日　　多田　佳代

子　ど　も　た　ち　へ

私が震災で得たもの…それは「家族を想う気持ち」

私の家族は父母姉 弟 の 5人家族。当時私は中学3年生、 弟 は 4才、姉は1つ上でした。両親は視力障害者です。

地震が起きて思った事…私と姉が思う一つの事…「父さんと母さんとまーくん（ 弟 ）助けな！」お互い口にせずとも二人の気持ちは一つでした。

地震で玄関のドアが開かず幸い 1階だった家のベランダから目の見えない父と母を一人ずつ周りの人の助けを借りず、姉と二人で支えあいながら脱出。4才の 弟 は、窓のさくの間からとなりの住人の方に受けてもらい、脱出。

火事にはならぬ様ストーブからこぼれた灯油をふき、父母 弟 を避難所へ。

それから私と姉は家の片づけをしに家に戻り、余震がある中、片づけ、休む間もなく、食糧調達。二人で壊れた屋根の上を自転車で走り、水、食糧をもらい、父、母、 弟 に食べさせました。自分達は食べず飲まずとも、まずは 弟 、そして両親…。いつまでもそんな想いが二人の心の中にあったのを覚えています。

電気もつかない部屋で、ヘリコプターからの灯りだけを見つめ、家族4人（父は一人で寝ていました）母、姉、私、 弟 寄りそって眠ったのを思い出しました。

お互いが想いやる…よりも…自分が家族を想う「力」をこの震災で感じました。

「何が何でもうちらが父さん、母さん、 弟 守らな！」

その想いは今でも変わりません…。

平成２４年１１月３０日

かいせいママ

子　ど　も　た　ち　へ

「阪神淡路大震災を体験して子供たちへ伝えたい事」

震災の時、私は東灘区の病院で働いていました。大変に混乱した中、病院のフロアーは廊下までも負傷者であふれ、物療室などは一時遺体の安置場所にもなっていました。スタッフは皆、負傷者の命を救うために懸命に働いていました。私は、地震で散乱した診察室などを使えるようにするために片付けたり、道路は大渋滞で車が使えないので通勤していたバイクで、赤十字血液センターへ輸血用血液を取りに行ったり、長田区の病院へ薬を分けてもらいに行ったりしていました。

そして、その日の夜、水道の蛇口をひねっても水が出ない事に気付き「待てよ、トイレはどうなっているのだろう」とドアを開けてみると案の定、うんこが便器にこんもりと盛り上がっていました。「こっこれは大変だあ」「このまま放ってはおけない」と思い、誰かから言われた訳ではないですが、それ以後トイレとの奮闘が始まりました。

ゴミ袋に盛り上がった大便を取り除き、川からくんできた桶の水を流し少しづつ復旧させていきました。思い切りと勇気のいる作業でした。患者さんが使うトイレは、病院の北館・南館の1階から３階までにあります。エレベーターは故障していたため1階から３階まで重い桶の水を何度も何度も運びました。

４日目位になると、左膝が痛みだし、階段を１段上がるのも涙が出そうなほどの痛みでつらかったです。

それでも、右足に体重をかけ左膝をかばいながら何度も運びました。

そうこうするうち、「なんで俺が、こんなことせなならんのだ」という気持ちになっている自分に気づきました。別に、誰かに「これをやりなさい」と指示・

体験から学んだこと

命令された訳ではない「自らやる」と決めたはずの事なのに…、そこで自問自答し「お前がやらねば誰がやる。今、お前に出来る事で、最善をつくせばそれでいいんじゃないのか。」と自分を納得させ、「やる気」を持続させる事はできました。しかし、それでも左膝の涙が出そうなほどの痛みは変わらないわけでつらかったです。

そんな時、全国から仲間が続々と支援に入って来てくれて「助かったあ」と思いました。「これで、この桶の水を3階まで運ばなくてもいいんだ」と思うと、本当に涙が出るほどうれしかったです。

当初は、展望も何もない。お先真っ暗な状態の中でこれからどうなるのだろう。という絶望感・不安感におそわれましたが、困っている仲間を・人達を助けようとする全国の人たちのお助けは、被災者・当事者にとってどれほど大きい勇気や希望を与えるか、計り知れないものがありました。

子供たちには、困っている人がいたら手をさしのべる、助け合う大切さを学んで欲しいと思います。そして、弱いものいじめするようなかっこ悪い人になるのではなく、困っている人を助けられるようなかっこいい人になって欲しいです。

また、勇気とは、自分の心を奮い立たせる正義の言葉だと思います。「義を見てなさざるは勇無きなり」と言います。自分の弱さに負けない、自分の心を奮い立たせ、自分の弱さに勝つ強さと勇気を身につけて欲しいと思います。そして、「義を見て成す」人間になることを目指して欲しいと強く思います。

２０１３年１月７日

大槻　登

子　ど　も　た　ち　へ

私が強く感じたのは、水の大切さ、そして日頃、いかに水をぞんざいに使っているか　ということでした。

実家は、風呂屋を営んでおり、毎日長蛇の列。何故こんなに待たすのか、と皆から苦情が出る度、一生けん命　次の説明をしていました。「ここは水をポンプでくみ上げているが、その水道管が直径１０ｃｍくらいの細い管で、お客さんが大量に使うと、その揚水量が使用量をカバーしきれなくなり、お湯を作るのに時間がかかるんです。だから皆さんも、お風呂に入ったら、なるべく節約して、後に入る人のことを考えてあげて下さい。」

皆　目を輝かせてうんうん、とうなずいて下さいますが、全く行列は減りません、ますます長くなるばかりです。おかしいと思って風呂場をのぞいてみると、じゃ口からお湯を出しっぱなしにしている人がたくさんいます。いくら説明しても、日頃からのくせはなかなか直らないのです。とっても情けない気持ちになりました。その頃は水道も止まっていて、本当に皆、水で苦労していた時期です。皆、わざとやっているわけではないのです。無意識なのです。

その時の教訓から、私は水でも電気でも（「節約」というより）大切に使うことを心掛けてきました。最今、節電が言われますが、本当に少しの心がけで大きな効果を生むと思います。

そしてくり返し伝えていくこと、思い出すことも大切だと　実感しています。

子どもたちへ

震災があった時、今小学生の男の子のお母さんは、高校１年生でした。一緒に隣りで寝ていた母の「キャー」という声と共に、今まで経験した事のない大きな揺れがしました。

私はただ布団をかぶり自分の事しか考えられなかったけれど、母は、布団もかぶらず体一つで私の上に覆い被さり守ってくれました。

あなたのお母さんは、いつも「勉強しなさい」「早く帰って来なさい」と怒ってばかりいませんか？

でもね、それは、あなたがかわいいから　大好きだからなんだよ。幸せになってほしい一心だよ。

そして　いつも心配しているんだよ。

いざという時　自分の事を命がけで　守ってくれるのは、家族だよ。世界中を敵にしても味方になってくれるよ。

そして、いつもごはんを食べてお風呂に入ってるけど、あたりまえだって思ったらだめだよ。

お父さんやお母さんが一生懸命働いて、守ってくれているから　あなたは、生きているんだよ。

人の命は、だった一つしかないから、毎日を大切に「ありがとう」の気持ちをいつも持って　生きてね。

平成２５年１月７日

子どもたちへ

私は泣いたことが二回あります。最後に泣いたのは、１８年前の震災の後でした。神戸の震災は、言いようもなく恐ろしく、そこに暮らす人々の生活を根源から覆すものでした。幸いにも私や家族、近隣の人たちには命があり、私の家はボロボロになりながらもとりあえず立ってはいましたから、ご家族や家を失った方々には、申し訳ない思いでした。それでも小さい頃から慣れ親しんできた食器や日用品や調度品が粉々に壊れているのを目の当たりにしたとき、なんとも切ない胸が締めつけられるような思いがしました。「形ある物はみな壊れる」あるいは「覆水盆に返らず」といった慣用句は存じておりましたし、それを理解する感情も持ち合わせておりましたが、一度にあれほど多くのものを失うと、人は何とも言えない虚脱感に襲われるものです。何か自分の全てを失ったような気がして、前向きな気持ちになるどころか、立ち上がることさえできないようなダメージを受けました。

当時私は他県に住んでおりましたので、震災後１週間ほどで自宅に帰ることになりました。出発は朝５時、まだ真っ暗な夜明け前。壊れかけた家とともに逝くと言った母、おまえは生きろと言った父、もう行くの？元気でねと声をかけてくれたお隣のおばさん。

私は多くの人によって支えられ、生かされていると感じ、後ろ髪を引かれる思いで家を後にしました。

神戸を離れる電車の中から見えた街並みは、普通の一日が始まろうとしていました。風が吹き、川が流れ、車が走り　人が集う　そんな当たり前の日常がありました。私は何不自由のない恵まれた日常に戻ろうとしているのに、自分一人だけが逃げていくような罪悪感にさいなまれ、こらえても　こらえてもあふ

感謝の気持ち

れる涙を止めることはできませんでした。

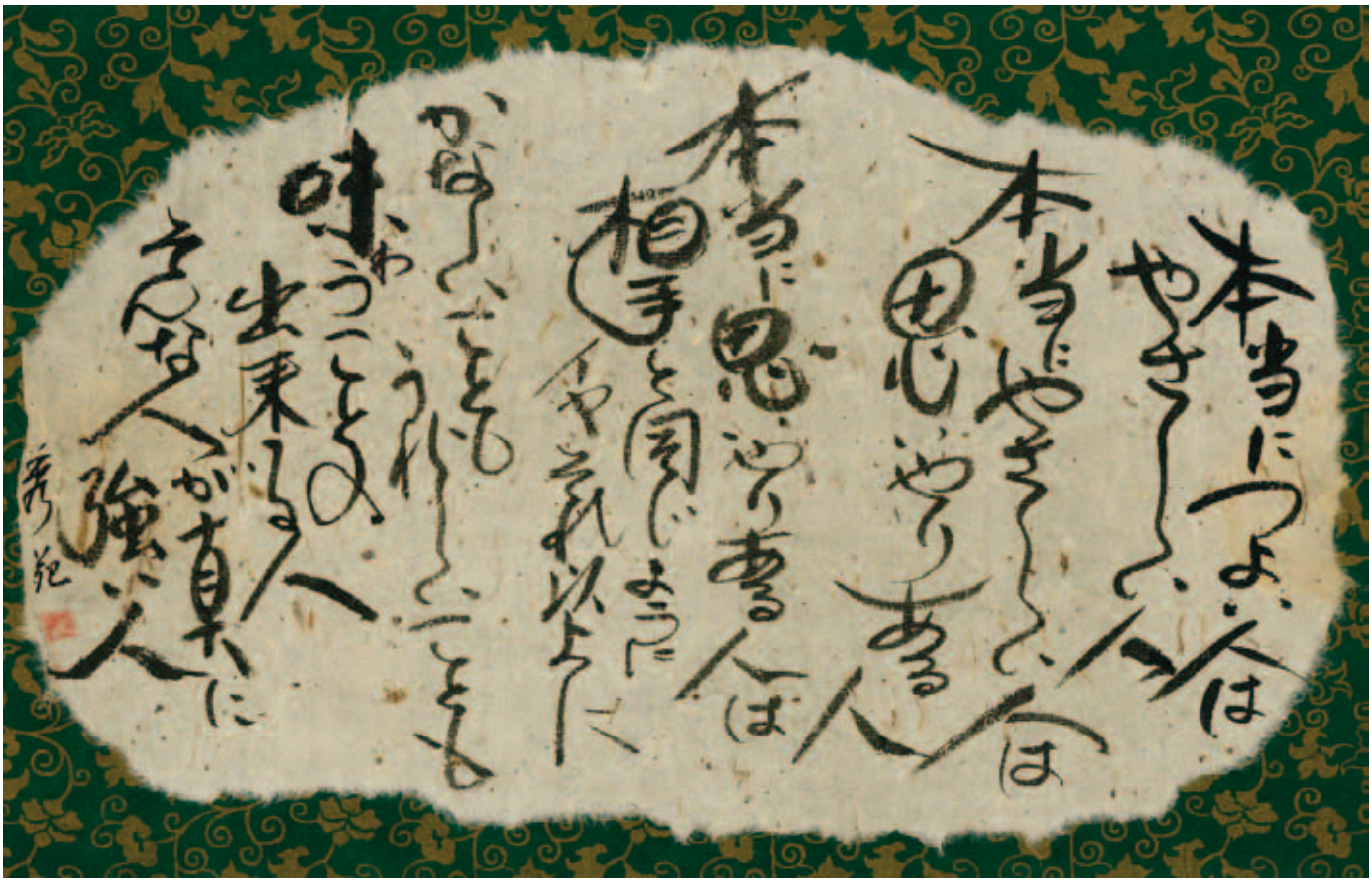
日本中から救援の手を差しのべていただきながら、お水や食糧を分け合い、寄り添って暖をとり、だれかのためにできることをする。

人はこのような非常時でさえ、助け合い、優しくなり、希望を持つことができるのです。

いつでも　どこでも　何度でも　お互いの幸せを求めることができるのです。

平成２５年１月６日

濱﨑　礼子



子どもたちへ

地震が起こった朝、私はお母さんと妹と同じ部屋で寝ていました。体が大きく揺れたのは、地面が揺れて家が揺れたせいだとわかるまで少し時間がかかりました。

となりの部屋で寝ている弟、下の部屋でいたお父さんが心配になりました。少し離れたところに住んでいたおじいちゃんやおばあちゃん、親戚たちが心配になりました。小学校へ避難して知っている人の顔をみてすごく安心しました。友達が心配になりました。

その夜、小学校で過ごしたとても寒く心細い時間が忘れられません。次の朝、住んでいた家が、街が全て燃えてしまったことを知り急に怖くなりました。友達の無事を心から祈りました。家がなくなり、服も本も友達からの手紙も何もかもなくなってしまいました。でも家族が生きていられることに感謝しました。

電話もなくて、電車もバスも走っていない中、友達が私たちを探しに来てくれました。ごはんを食べさせてくれたり、身の回りのものをたくさんくれました。何より励ましてくれました。多くの人に支えられました。

あの大きな地震から18年、今もその時の友達に支えられて今があります。生きているというごくごくあたり前のことに心から感謝していつも近くにいてくれる大切な人への温かな気持ちをまっすぐに伝えれる人間でいようと、毎年1月17日に想います。

そしてもっともっと大きな地震、津波で今もまだ悲しい思いをしている人たちのことを忘れずに、決して他人事ではないと心に留めておきたいと思います。多くの人に、多くの友達に助けられた事を、今も温かく想い出し、私にも何か出来るのではないか、と思い続けたいと思います。

どうか家族を、友達をどんな時も大切に想える人でいてください。

２０１３年１月５日

感謝の気持ち

子どもたちへ

私が子供たちに伝えたいのは「感謝」です。

私は、震災にあい、いろんな感謝に気づきました。

それは、ひとへの感謝、食べ物への感謝、住まいへの感謝、道路や鉄道への感謝、そして、生きてることへの感謝、です。

例えば震災で、私の住まいは全壊してしまいました。しばらく余震におびえながら、きゅうくつな車の中で寝泊りです。

また、地震で倒壊した建物のガレキは、道路を至る所で通行できなくしました。その結果、生活に必要な用品が手に入りにくくなりました。

私は、毎日、明石市にある食品工場で、救援物資となるサンドイッチを作りました。その時は、震災にあわれたみんなのために必死でした。それまで感じたことのない使命感に燃えていたことを、よく覚えています。

私は幸運にも生き延びて、その後結婚して息子を授かり今まで生きてきました。それは全部、ともに復興に励んだ皆さんのおかげだから、いつも感謝を忘れないようにしています。

震災のあとに生まれてきた子供たちにも、いつも感謝の気持ちを忘れずに育っていってくれたらいいな、と思います。

平成２５年１月６日

そーにょ

子 ど も た ち へ

１・１７　あたり前のことがあたり前でなくなった日です。
長く感じた時間も実際にはたったの数分で
全てのあたり前がなくなりました。
水も出ない　電気もない　ガスも出ない
外に出ても・家にいても　次のゆれがきたら
自分も押しつぶされるんじゃないかとの不安で
いっぱいでした。
“大丈夫ですか？”と心配し声をかけて下さることや
水が飲める事・暖房にあたれること　そんな普通の
こと１つ１つが感動でした。
地震は全てをこわしたけれど　忘れていたあたり
まえのことに感謝する心を思い出させて
くれたように思います。
誰かがいて自分があり　自分が又誰かのために
なれる存在であることを忘れないで生きている
事を大切にしていってください。
あたりまえに感謝しながら！！

平成２５年１月３日

２児の母

子 ど も た ち へ

今ある“あたり前の日常”に時々でもいいので、
感謝しましょう。

自分の家に帰ること、温かいごはんが食べられる事、
歯みがきができること、トイレがあること。
温かいおふろに入って、頭もしっかり洗えて、
温かいお布団に入って　ゆっくり休んで、そして
また明るい朝が来ること。
　友達や兄弟や親と　楽しく話をしたり、ケンカ
できること。

今、自分が生きている事はあたり前ではなく、
生かされているという事。

みんなに感謝、　日常に感謝、　親に感謝、
生きている事に感謝！

平成２４年１２月１８日

ゆーじとはるかのお母さん

子　ど　も　た　ち　へ

ありがたいと
思ふ事
もったいないと
思ふ事

ぐちや欲求は すぐに出せても
ありがたいと感謝する事
もったいないと つつしむ事は
とても 簡単だけれど とても難しい。
それが わかる 男は すばらしい。
それができる 男は もっと すばらしい。

年　月　日　お名前 あおいよりのお母ちゃん より

◆この欄は公開します。とく名を希望の方はペンネームまたは空白でお願いします。No. 48

子　ど　も　た　ち　へ

想像できますか。
昨日までの見慣れた街並みが、目を覚ますと崩れ落ちていた光景を。
「また明日ね」と言って別れた友達と、もう会えない日が突然来たことを。
いつもなら平凡で退屈だと思っていた家族や我が家を、一瞬で失う恐ろしさと悲しさを。
誰だって　そんな経験はしたくなかったし、想像もしたくなかったけれど、
１８年前、そんな恐ろしい災害が起こってしまいました。

でも、そんなとてもつらい出来事の中でも学んだことがいっぱいあります。
一番大切なことは、今を生きること。そして人と人の絆。

だから、今を生きることに一生懸命になりましょう。つらいことが多くても生きることをあきらめないでください。どんなに失敗してもいい。どんなにカッコ悪くでもいい。走ることが苦しくなったら立ち止まってもいいんです。
耐えられない時は逃げることがあってもいいんです。ただ　生きることだけで素晴らしいと思ってください。生きている自分に感謝してください。
　そして　悩みがあったら、誰でもいい。悩みを打ち明けてください。きっとあなたをわかってくれる誰かがいるはずです。そこから新しい絆が生まれます。

平成２５年１月２１日

Ｋ．Ｓ．

子　ど　も　た　ち　へ

18年前のあの日あの時、お母さんはお父さん、1才のお兄ちゃんと川の字になって寝ていました。地面の底から突き上げるような地震の揺れは、今まで経験したことがない大きなものでした。

幸いなことに怪我もなく、命も家も無事でしたが、時間の経過とともに報道される被害の大きさに震えが止まりませんでした。当たり前の日常が当たり前でなくなってしまったのです。

その頃、お母さんは西宮市内の郵便局に勤めていました。郵便局の周辺も被害は大きく、いつも利用してくださっていたお客様やその家族の方が亡くなられました。ついこの前まで笑顔で話し掛けてくれた方が、その日を境にもう話をする事も顔を見る事もできなくなり、当たり前の日常を奪ってしまった地震の怖さを初めて知った気がしました。大切な人を亡くされた方は、一生その悲しみや助けてあげられなかった悔しさと向き合っていかなければならないのです。

その後も、日本国内や海外で大きい地震は何度もありましたが、どこか他人事のように感じる嫌な自分がいる中で、自分自身が経験した地震を思い起こすきっかけにもなりました。

そして２０１１年の東日本大震災。その映像はテレビで何度も見たでしょう。阪神・淡路大震災の時とはまた違った津波の被害、そして今もまだ自宅に帰ることができない人が大勢いる原発問題。

天災はいつ起こるかわからないし、いつ自分の身に降りかかるかもわからない。起こってしまった事は止められないけれど、人間の力で防ぐ事ができた被害もあったのではないかと思います。

子どもたちへのエール

こんな時こそ自分達にできる事を考えて、どんな小さな事でも力を合わせて取り組めば、やがてそれは大きな力となって、当たり前の日常を取り戻す原動力となるのです。その為には命の大切さを忘れずに人間の大きな力を信じて、前に進んで行って欲しいと願います。

２０１３年１月１４日

森岡　美加

子　ど　も　た　ち　へ

１９９５年１月１７日　５時４６分　阪神・淡路大震災が発生しました。多くの人が倒れた家の下敷きになったり、火事の炎に包まれたりして亡くなりました。電気・ガス・水道が使えなくなり、無事だった人も不便な生活をしなければいけなくなりました。

あの惨事から１８年。みなさんがまだ生まれていなかった頃のことです。「ずいぶん昔だなぁ」「私には関係ないよ」そう思う人も中にはいるでしょうね。

２年前には東日本大震災がありました。この震災ですら昔の出来事のように感じられるのではないでしょうか。

先日、家族で岐阜県へ旅行に行った時、住人の方から「どこから来られたのですか？」と聞かれ、「神戸です。」と答えたところ、「震災は大丈夫でしたか？」と聞かれました。私はちょっと驚きました。震災といえば東日本大震災の方が記憶に新しく、神戸のことはもう忘れられていると思っていたからです。（私の家は全壊でしたが、幸い家族は無事でした。）他府県の方がこんなにも長く覚えていてくれた事、気にかけてくれていた事に胸が熱くなりました。他府県の方ですら覚えている震災を、私たちが忘れてはいけませんよね。

阪神・淡路大震災は、テレビや新聞で取り上げられる事が少なくなってきたし、街の中でも震災があった事を感じさせるものは何もありません。でも、今自分が住んでいる場所で確かに大きな地震があり、多くの人が亡くなった事をどうか忘れないでいて下さい。神戸っ子として、なぜ震災行事をするのか、先生方や震災を体験された方々が何を伝えたいのか、そして、自分たちに何ができるのかを考える一日にして欲しいと思います。

Ｈ２５年１月１７日

子　ど　も　た　ち　へ

震災を経験して感じたことは、毎日のなにげないあたり前の生活が、いかに大切で尊く、ありがたい事なのかと言うことでした。

“しあわせ”は特別な事の中にではなく、自分の心の持ち様で普通の生活の中にみつけることができると言うことでした。

きゃりーぱみゅぱみゅさんの歌の中にある　“同じ空が、どう見えるかは心の角度次第だから…”です！！

でも日々の生活の中、「感謝する」という大切な事を言葉ではわかっていても本当のところはわかっていない気がします。（私自身も）

だから、今の自分が今ここに在るのは、自分一人の力ではなく

数々の人に、ものに、事にささえられて在ると言うことを自覚して

まずは　自分自身を、自分の命を大切にして懸命に生き、

まわりの家族を友達を人々を　自然を　全てのものを大切にしていけば感謝になっていくと思います。

幼い頃は与えられる喜び…大きくなるにつれて自分で得る喜び…

大人になれば与えてあげる喜びを知ると思います。

今は色々なたくさんの事を自分に吸収して　自分を成長させて

すばらしい未来を生きて下さい。

２０１３年１月１日

ほのてて

阪神淡路大震災から
十八年目の春を迎えました。
十八年の間には厳しい現実に直面しながらも多くの方に支えられ励まされ暖かい支援と共に困難を乗り越えられ今日に至っています。
感謝です。
しかし十八年という歳月は恐ろしいものです。
平穏無事の日常生活が続くと いつしかあの忌わしい震災のことを忘れてしまうのです。
被災者ですら当時の記憶が薄らぎ その上震災を知っている人が年々少なくなっていきます。

「時間が解決してくれる」と言う言葉がありますが、
月日の流れによってさまざまな記憶が次第に薄らいでゆく事に思えある意味いいことなのかも知れません。
一月十七日
阪神淡路大震災
そして
東日本大震災を忘れないで下さい
忘れてはならないのです。
生きたくても生きられなかった多くの尊い命を無駄にすることなく前向きに生きていくことが未来につながると思います。
力強く
震災を知らない人に知ってもらうことは仲々難しい事だと思います。
子ども達、若者世代に語り伝え書き残していく中で
平成の二大震災があったことをしっかりと記憶に留めておいてほしいと願っています。

生かされている者の一歩一歩の積りで震災復興のモニュメントが新長田に誕生しています。
鉄人28号です。
広場では色々なイベントが開催され深山の人が集まり出会いあり、感動あり絆が生れ活気が出始めています。
神戸マラソンのコースにも入り賑わいました。
阪神淡路大震災を乗り越えつつある今東北の被災地に心を寄せ応援して行きたいものです。
大震災を忘れることなく復興に向って皆さんの力で頑張って生きぬきましょう。
蘇れ被災地!!

メッセージを読(よ)んであなたが感(かん)じたことを書(か)いてみてください。

子どもたちからの感想文

子どもたちへのメッセージ集 2012 を読んだ子どもたちから、たくさんの感想文をいただきました。その中からいくつかをご紹介します。

本庄小学校　坂野　志穏

このメッセージを読んで、震災にあった方々の気持ちがものすごく心にのこりました。「震災にあったのは、ものすごく悲しいけれど、その悲しさを日本や日本以外の人、全員で助けあってのりこえたときに、また幸せの希望が必ずやってくる。」という言葉や、「震災で泣きそうになり、とても困った時に、ボランティアの方々の笑顔や気持ちではげまされ、またやりなおそうと思えた。」などの言葉にすごく感動し、一人ではできなくても、みんなで助けあってやれば、必ず希望は見えてくるということを改めて学び、本当にすごいなと思いました。

このメッセージにあったように、これからはぼくたちが次の子どもたちに教えていく番だと強く思います。これからも命を大切にし、一生けん命生きていきます。

本庄小学校　青砥　里紗

私はこのメッセージなどを読んで、本当に助けあったり支えあうことは大切だなぁと思いました。なぜなら、自分の命は自分で守らないといけないけれど、もし自分だけではできないことがあったら、みんなで助け合うことでできるようになるかもしれないからです。そして、助けあうことで一人の命でも守ることができるかもしれないからです。

もう一つ感じたことは、１日１日を大切にしていくことが大事だと思います。今ふつうに水がでていたり、ふつうにおふろにはいれたりすることが、その１日でできなくなります。そして、昨日ふつうにいっしょに帰った子とその出来事でしゃべることもできなくなります。

だから１日１日大切にしていこうと思います。私は、日々みんなと助け合って、生きていきたいです。

友が丘中学校　髙木　基夢

震災が起こってすぐに助け合える人たちに感動しました。自分の家がなくなり、家族が生きているかどうかもわからないという状況で、周りの人を助けようとする心の広さがすごいと思いました。残り少ないものでも、困った人がいればあげるというやさしさは、すごく勇気がいるものだなと思いました。地震が起こると、全国から食べ物やティッシュ、水などを送ってくれることは、日本人の絆をすごく深めるものだと思います。

僕は、近所の人々との日々のあいさつがとても大事だと思います。なにか災害があったとき、助け合うような人間関係を築くことができるのが、その「あいさつ」です。僕もこれからは毎日欠かさず、あいさつをすることを心がけます。

友が丘中学校　村井　絵梨那

神戸には生きたくても生きることのできなかった命がたくさんある、ということがいくつかのメッセージに書いてありました。

私はときどき「幸せになりたい」と思うことがありました。ですが、大きな地震や津波があり、水や電気が満足につかえなく命まで失ってしまうことを考えると、生きている“今”が幸せなんだなと思いました。自分のことも大切にし、それに他の人に笑顔をあたえるということが大事だと思います。

今後、地震や津波があったとき、これまでのことを参考に、これ以上大きな被害を増やさないようにしたいです。地震の怖さを、私より小さな子たちにも伝えていきたいと思います。

友が丘中学校　常峰　夏海

私は震災を経験していないので、本当の辛さとか、悲しみ、怒りなどは分かっていないと思います。しかし、たくさんのメッセージを読んで自分よりも、自分以外の他の誰かのために・・っていう文をよく見ました。“人間というのは、いざというときは自分や家族が一番”と思っていましたが、けっしてそうではないんだと思いました。知らない人とでも手をとりあい、助けあっているというのを聞くと、とても感動しました。自分も大変ななかで、他の誰かを助けようとするということは、はかりしれない決心がいるのだと思います。もしも自分が同じ立場になったら、誰かのために必死になることが出来るか分かりません。亡くなった方も多く、そういう時は悲しみや苦しみが勝ってしまうのかもしれないけれど、それでも『感謝』の気持ちを忘れずに生きている強い心を持った人々が日本にはたくさんいるのだと思いました。

駒ケ林中学校　橋本　杏

私は、お母さんとケンカしたり、勉強がいやだなぁーとか思ったりするけど、震災のひ害にあった人は親を亡くしたり学校に行けなくなったり、私がふだんしているふつうの事ができなくなるんだなぁと、メッセージ集を読んで思いました。自分たちが住んでいた街がこわれたり、家がこわれたり、すごくつらいのもよくわかりました。私のまわりには、親もいるし、友達もいるし、家も学校もあって、ほしいものがあれば買いにいけるけど、震災は水をもらうのにならんだり、自分が当たり前に生活している事がすごく幸せな事なんだなぁと思いました。食べ物もいつでも食べれる事が幸せなんだなぁと思いました。これからは、できるだけ食べ物を残さないようにしようと思いました。物も大切に使おうと思いました。それからボランティアが震災のひ害をなおしてくれたので、自分もボランティアに参加しようと思いました。小さなことでも、ぼ金とかをしようと思いました。

福田中学校　谷許　日菜子

私はメッセージ集を読んでこう思いました。「人は強い」と。どんな自然災害が起きても、どんなに苦しい状況であっても、“人の力”があるかぎり、ガスが止まっても、電気が止まっても、あらゆるライフラインがとだえたとしても、生き残れるエネルギーになるのではないかと思います。「今の生活が本当に幸せ」と思えるのは、この経験があったからなのかも知れないし、「人の強さ、力」が地球に試されたのかも知れません。いつの時代でも、この「人の強さ、力」を持ち、どんなことも受けとめて生きていくのが大切だと感じました。

福田中学校　春名　優希

人と人とのつながりを感じました。親に反抗してしまう今の私は“1人でも生きていける”と思っていたことがありました。けどこのメッセージ集を読むと、私の周りにいる人はみんないろいろな安心を与えてくれていると思いました。

夜に目をとじてねむれること、ご飯を食べれること、他にも探せばたくさんあると思います。

自分1人でその場に立っていても、次はどうしよう・・明日は・・今は・・？と 不安にのみこまれてしまうと思います。

このメッセージは、改めて思うあたり前のこと1つ1つにある安心を思わせてくれました。

人を大切にして過ごしていきたいです。

福田中学校　川口　舞子

私が今ここにすわりこれを書けているのは、たくさんの命がつながりあっていることのおかげだと強く思いました。何があっても人は1人では生きてゆけないので、たすけあい

思いやることで、何かあってから後悔することのないように、一日一日を大切に心にきざんでゆきたいと思います。

また、防災にも力を入れてゆきたいと思いました。地震の時におちついて対応できるように学校での訓練にも真剣に参加して被害が拡大しないように心がけます。日本や世界で災害があったら、そこで困っている人たちをたすけたいとも思いました。

「命」

上野中学校　志筑　由隆

「命の大切さ。」僕は知っているつもりだった・・・。

でも僕たちは、喧嘩をした時やむかついた時ましてやおふざけ半分で「殺す。」や「死ね」「きえろ。」などと言ってしまっている時はある。それでも僕達は命の大切さがわかっていると言えるのか。だれも本当に死んでほしいから言ったわけじゃない。でも軽くそんな事を口にしている時点で「命の大切さ。」を知っていないと僕は思った。

これを読んで、今まで何千何万人もの人がつないできてくれた命、守ってきてくれた命ということを深く知った。それも自分だけじゃない。友達も、先輩も、先生も、兄弟もみんなが大切にし大切にされ、つながってきた命だという事を思いしらされた。

今は、まだ守られる側だけどもっと大きくなれば守る側として、みんなの命を大切にして生きていこうと思った。今回この文章を読めて、すごくよかった。

地震を知らないぼくらの使命

上野中学校　井川　洋

「忘れない。忘れてはならない。」

メッセージ集にあったこの言葉が心に残りました。ぼくたちは阪神淡路大震災は経験していません。しかし、ついこの前の東日本大震災でさえあまり話題に上らなくなっています。

東日本大震災の直後にぼくがたくさん募金しようとしたら、

「その半分は被災地がわすれられかけた時に届けてあげろ。その時が一番辛いから」と止められました。父は青谷で被災しました。幸い被害はほとんどなく、その分自分たちだけ助かってよいのかという思いがあったそうです。数日後に尼崎の職場に戻ると震災は過去のことにされていて、同僚とシャワーを浴びている時、悔しく、申しわけなく思ったそうです。母は大阪出身なので、父の話を聞くと、いつも申しわけなさそうな顔をします。

この地震大国日本にいる限り、地震とは切っても切れない縁があります。そのためにはやはり忘れないことが大切だと思います。今までの震災、そしてその中で生まれた人と人とのつながりを絶やさずに、未来につなげて行きたいと思いました。

上野中学校　川﨑　晴香

「晴香の誕生日は阪神大震災の日やねんで」と言われ続けて１４年たちました。誕生日の日には悲しいニュースが流れて幼稚園のころはとても嫌だったことを覚えています。

しかし、そんな経験からなのか小さい時から震災のことを多く考えていた気がします。いつも自分なりに考えた結果は同じで、「今を大切にする」でした。メッセージ集のみなさんのおかげでこの思いは一段と強くなりました。とてもありがたく思いました。

東日本・阪神での震災のことがこれからも風化していかないように今の気持ちやみなさんに聞いたお話を私が伝えていける範囲でこれからも伝えて生きたいと思いました。

日本にいるかぎり震災などは一生で一回は経験すると思っているので、その時はメッセージ集に登場した人たちのように冷静に物事を判断して、周りへの気配りをして乗り切っていきたいです。最後に言いたいことは「お母さん産んでくれてありがとう！」です。

～命の尊さと震災の教訓を語り継ぐ～

「子どもたちへのメッセージ運動」の取り組みをご紹介します

子どもたちに命の尊さと震災の教訓を語り継ぐため、平成 16 年 4 月に運動を始め、平成 24 年度までに 1,974 通のメッセージが、寄せられました。

震災のときに生まれた子どもたちが大人になるまで、毎年、メッセージを募集し、伝えつづけていく予定です。

２月～翌年１月
メッセージを募集

１月中旬～下旬
メッセージ運動展
（市民ギャラリーにて）

１０月～翌年１月
子どもたちに届けます

発　行：平成２５年１０月
発行者：神戸市・神戸市教育委員会
編　集：神戸市保健福祉局総務部人権推進課　電話 078-322-5234
協　力：神戸市教育委員会指導部人権教育課　電話 078-322-5807
〒650-8570　神戸市中央区加納町 6 丁目 5 番 1 号
広報印刷物登録平成 25 年度第 211 号Ａ－１

Heartful City KOBE
みんなにやさしいまち、みんながやさしいまち神戸

リサイクル適性Ⓐ
この印刷物は、印刷用の紙へリサイクルできます。